慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 動物名から道具名へ : メトニミ・ メタファ・ 意味の変化 |
| Sub Title | Des noms d'animaux aux noms d'outils : metonymie, métaphore et Changement de sens |
| Author | 川口, 順二(Kawaguchi, Junji) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1998 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.112(269)- 127(254) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 山本晶教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0127 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 動物名から道具名へ
# ——メトニミ・メタファ・意味の変化——

川口　順二

## 0．はじめに

本稿は動物と道具・器具・機器・機械（以下「道具類」と略）という2つの意味領域の関わり合いの性質をメタファ，メトニミなど伝統的に修辞学や言語学で扱われてきた概念の考察を進めながら調べていく(*)。メタファやメトニミの概念は近年認知言語学からの集中的な研究があり，カテゴリ化の立場からの定義や，認知活動に占めるこれらの位置づけに光が当てられつつある。ここでは文化的側面の重要さを意識しながら，意味の変化の規則的傾向を求めるが，用語論・術語論の糸口をも探っていきたい。第1節で動物名がどの様な意味領域で用いられるかを簡単に概観する。次に第2節でメインテーマである道具類の名称を扱った後，第3節で問題を提起し，仮説を提出する。

## 1．動物名の意味領域

### 1．1．概観

動物名がまずあってそこから様々な領域への転義が形成されるという考え方は，生物としての動物名を中心的な意味と捉えてそこから意味のネットワークを構築することになるが，これは論理的な見方であり，歴史的与件が消えてしまう危険がある(1)。単に動物名が様々な意味領域で機能することを確認し，それがどの様な領域があるかを見ていくことから初める。動物名が生物としての動物を意味するのは当然だが，人はこれを機能の観点から見ることもできる。食料としての肉・乳・卵の供給源，運搬・労役の担い手，衣類などに用いる毛皮や皮革の持ち主，侵入者から家を守った

り，家畜の番をする協力者，愛玩の対象等，様々な機能が見いだされるが，動物名が何を喚起するかは文脈に依存する。英 cow/beef や sheep/mutton，日「うし」/「ぎゅう」（牛）などのように動物名の適用領域によって語形態が変わることも起こる[2]。ここで動物名はメトニミにより労働力・食料・皮革等への転義したというより，動物名は与えられた言語文化の中でその機能をも取り入れた意味を持ち，文脈により必要な領域が活性化される，と考える[3]。

2つ目の領域は動物名が動物の性格を，そしてその性格を持つ人に当てはめられものである。独 Hund「イヌ」が「闘争的な・忠実な・みじめな・虐待されるものの象徴」(GDJW) と言われるし，「ずるい（キツネ)」「おとなしく従順な（ヒツジ)」などがこの例である。これは言語によって異なるだけでなく，歴史的にも変化しうる[4]。また動物の行動から振舞の特性が抽出されて，「のろい〔カタツムリ〕」，「〔走るのが）はやい（ウサギ)」などの表象が生まれ，性質の具現として動物名が用いられる。動物の領域から分離しているためにメタファの用法と分類されている[5]。

3つ目の領域では動物の名称が他の動物や植物に当てはめられる。これは言語にかなり一般的な現象であり，民俗学や人類学で話題にされることが多い。この分野は考察の対象から外すが，後で述べる道具類の領域に見られる命名の特性が一部ここにも見られるようである。Guiraud(1967)，松井（1996)，Nicolaï（1997）参照。

4つ目の領域は道具類及びその部品の領域である。本稿の中心テーマだが，これを論じる前に動物名も介入する類義語系について見ておきたい。

1．2．類義語系 série synonymique[6]

「頭」tête を指すのにフランス語の隠語で果物を指す語が用いられると，他の果物そして野菜の名称も「頭」を指すようになる。果物・野菜の意味領域がソースドメイン(以下 SD)，「頭」がターゲットドメイン（以下 TD）として機能するわけで，具体的には poire「梨」/pomme「りんご」/cassis「黒すぐり」/fraise「いちご」/citron「レモン」/calebasse「ヒョウタン」/tomate「トマト」/patate「ジャガイモ」/ciboule「ネギ」

などが「頭」の名前となる（Guiraud (1957): 56)。SDのこれらの要素はTDに関して類義語としての機能を持つことになる。

動物名に戻ろう。「警官」を仏語の隠語でbourrique「ロバ」, roussin「[古]（軍用，狩猟用の）去勢していないウマ」, vache「雌牛」, poulet「若鳥」などと言うが，様々な動物を表わすこれらの語は，全て隠語で「ウマ」をさすGruiraud ((1956): 57, (1964): 119-120)[7]。ここではSDの諸要素が異なる意味を持っているが，隠語では「馬」の意で類義語であり，これがTDの「警官」に対応する。あたかもSDがTDの命名生成装置であるかのように機能するのである。特定の社会グループ内のみで通用しグループ外には通用しないことが隠語の条件の1つだが，そのために隠語は常に語彙を変えていく。これが類義語系の成立を社会的に説明するが，この他に言葉による遊びの要素も介入する。しかしこれだけではないことを第3節で論じる。類義語系は特に特殊（用）語である隠語に目立つ現象だが，次節では専門用語にもこれがより広い適用範囲を持つことを見ていく。

## 2．動物名と道具類・部品

道具類は上に見た動物，性質，動植物の領域と異なり人工物artefactの世界に属す。物理的存在として明確な輪郭を持つ対象であり，典型的なモノであると言え，その存在目的は人の意図によって規定されている。またその部分もその機能によって存在と輪郭が保証されており，しばしば全体から取り出すことができて，「部品」,「パーツ」などと呼ばれる。現代の道具類（ロケット，コンピュータ，ロボット等々）を図鑑などで見ると1つの傾向が浮かぶ。例を「核エネルギー」nuclear energyに取ると，次のような語彙が登録されている。

（1） 使用済燃料貯蔵タンクspent fuel storage bay；蒸気発生室冷却器steam generator cooler；分離器蒸気排出管separator steam release；復水路condenser（『絵でひく英和大図鑑ワーズ・ワード』，同朋社）

ここでは語彙の透明性が観察される。すなわち個々の名称がその機能

(貯蔵，冷却，排出，復水（「液化」)），機能の関わる対象（使用済燃料，蒸気発生室，分離器蒸気）や形態（管，路）などに分析されるわけで，英語などでも同様の傾向が強い。

このような分析的性格をもつ語彙と対蹠的に，伝統的な命名はメトニミやメタファの世界である。

暖炉で薪を乗せ，または焼き串を乗せる台を「薪架（まきうま)」と呼ぶ。フランス語では landier (SRDFJ)，英語では andiron (HFED EF)，ドイツ語では Feuerbock, Bratbock, Kaminbock (LGED) などがこれに当たる[8]。日「うま」には次のような記述がある［必要な部分だけ］。

（2） 馬をかたどったり，馬の名称を用いたりした玩具，遊戯用具や道具。（イ）馬の形に似せて作った玩具。木馬などをはじめ，その種類はきわめて多い。（ロ）踏み台や脚立の俗称。（ハ）体操用具の一つで鞍馬のこと。（ニ）すごろくのこま。（ホ）将棋のこまで，桂馬または，成角の略。（ヘ）天正カルタ，うんすんカルタ，めくりカルタの組み札の一つで，騎馬の絵があるもの。［方言］：○屋根の上の押え木，○刈った稲をかけて干す設備。稲かけ。○踏み台 (NKD)

次に仏 landier の語源は，「昔台所で焼き串を乗せた大きな薪乗せ台 chenet[9]のことで，ゴール語*andéos「若い雄牛」（アイルランド語 ainder「娘」，ウェールズ語 annec「若い雌牛」参照）から出た中世仏語 andier (13e s.) に定冠詞が着いた語」(TLF) とあり，「薪架はしばしば両端に装飾用に動物の頭が形どられていた」(id.) という注が加えてある。

英 andiron はフランス語からの借用と考えられるが，iron の部分は「鉄」が介入した民間語源による形である。

独 Feuerbock, Bratbock, Kaminbock は合成語だが，Feuer-「火」，Brat-「焼く，炙る」，Kamin-「暖炉」を除いた部分の Bock は「雄山羊，雄羊，雄鹿，雄兎」などある種の動物の雄を示す語である。

次に「画架，イーゼル」を指す語として，仏 chevalet と英 easel，独

Eselを考える。

Chevaletはcheval「馬」に指小辞語尾-etが付いた形ではあるが，「画架」は「子馬」と同じものではない。英easelはオランダ語ezelからの借用で独Eselと同様「驢馬」ass, donkey；âne（<Lat. asinus）に対応する。独語のEselは「驢馬」と同時に「工作台，うま；画架」をも意味するので，たまたま仏chevalet「画架」にcheval「馬」と形の完全な一致がないが，この不一致の重要性は低い[10]。さてこのchevaletには様々な意味がある。

(3) Chevalet：(A) 架台，脚台；[特に]（絵画制作・展示用の）画架，イーゼル。(B) [音楽]（弦楽器の胴と弦との間に挟んで弦を支える）駒，ブリッジ。(C) [軍事] 砲架，銃架。(D) [皮革] 馬，馬掛け台：馬形の架台で，なめし中のぬれた皮革をかけ，脱水または運搬に用いる。(E) [土木]（仮橋の橋床を支える）橋脚。(F) [鉱山]（試掘坑用の）巻上げ櫓。(G) [機械] ～de levage（列車，大型車などを持ち上げるのに用いる）起重機，ガントリークレーン。(H) [ガラス]（板ガラスの運搬や立てかけ用の）ガラスホールダー。(I) [樽] 樽万力。(J) [馬具] 蹄やすり台。(K) [歴史] 拷問台（SRFJ）

すべて何らかのものを上に乗せて支える機能を持つことに気づく。(B) の「駒」からは日本語でこれが「馬」を意味することが思い起こされる。そこで，TDを「台架」の領域として，そのSDを動物に求めてみよう。

(4) ○英horse：「馬」；「ものを乗せたり支えたりする）脚つきの枠（台），のこびき台（saw-horse＝仏chèvre「牝ヒツジ」＝独(Säge)bock），脚立，（皮の）なめし台」，a towel horse「タオルかけ」，clothes horse「洗濯物かけ」

○日「ウシ」：「竹や木を家の棟木のように組んで立てたもの。ものを立てかける台にする」；[方言]「稲かけの横木」，「刈った稲穂をかけて干す設備，稲かけ」；「梁の大型のもの，あるいは棟木」（『角

川古語大辞典』)；「釜などの鋳物の制作工程において，木型を固定させる大きな木片」(『技術と民俗（下)』，日本民俗文化体系14，小学館，pp. 436-7（栃木県，図と写真アリ))

○英 buck：「牡鹿」；「支持物；組立作業などを行っている間，材料や部品を支えるのに用いるジグ・パイプ，枠組みなど」

○仏 chevrette：「若い牝羊」；「（鍋などを火に掛ける）鉄製の三脚台，五徳」(tripod； trivet)，「(暖炉の）小薪掛け」(kleine Feuerbock；fire-dog, andiron)

○仏 chevron：(「若いのろ鹿」＞)「(屋根の）垂木」，「垂木材（8センチ角の角材)」

○仏 mouton：「[建築］鐘を吊す横木」[11]

○仏 sommier：「[建築］鐘を吊す横木」，「(ベッドの）ボトム」(＜後期ラテン語 sagmarius（＝“bête de somme”「運搬用の家畜」，18世紀まではこの意味で（DHLF))

○仏 poutre：「[建築］梁」(＜中世仏語 poutre「若い雌馬」(DHLF))

○仏 chantier：「[工事・作業］現場」(＜垂木＜架台＜ぶどうの支柱＜ラ cantherius「運搬用の馬」)（FEW, DHLF, 但し DEO)。

○仏 baudet：「木びき台」(＜「ロバ」)（DHLF, cf. DEO)

○独 Bock：「架台，作業台，文書架，木びき台」等（GDJW)

○独 Wolf：「オオカミ」；「藁葺き屋根で藁を支える梁」等（DW)

以上から SD が「動物」で TD が「台架」という対応が一般化できる。先にみた「警官」に対応する馬の諸名称のケースと異なり，ここでは TD が1つの概念に限られておらず，複数の対象が対応している。

2つ目の対応は TD が押したり突いたりする道具類である。「タコ」は日本語で蛸，凧の他に「杭を打ったり，土や割栗石を突き固めたりするのに用いる胴突。直径30～40cm のカシまたはケヤキの円筒に2～4本の把手をつけ，先端に金輪をはめたもの」(NKD) を指す。英 ram「雄羊」はドイツ語の Ramme に対応するが，後者は方言形であり Widder が標準

形である。ramには「(杭打ち用の) 分銅，落としづち」の意味があり，Rammeは「くい打ちハンマー，ラム（打撃によって炭層をくずす）採炭機」(GDJW) の意味では標準語である。フランス語のbélier「(去勢しない) 雄羊)」も「[軍] [土木] ドロップハンマー，杭打ち機」で，またmouton「(去勢した) 雄羊」にも「[土木] (杭打機の) ドロップ・ハンマー」の意味がある。同様にドイツ語の既に見たBockは動物の意の他に「突き棒，胴つき，たこ」を意味する。南部方言ではKatze「ネコ」も「タコ」を指し，フランス語のcanard「アヒル」にも「杭打ち機」の意味がある。

杭打ちは上下の垂直方向に力を加えて押し，突いていくものだが，これを水平方向に働かすものに中世の破城槌がある。フランス語bélier「雄ヒツジ」は中世に羊の名称として用いられた中世ラテン語のbelinusから派生するbelinという固有名詞があり，これは人の姓として極くありふれたものだったのだが，語尾を変えてbélierが雄羊の名称になったものである(12)。このbélierはまた木の梁を指したが，これは端に青銅で雄羊の頭が付けられていて，城の包囲戦で壁などを突き破るのに用いられた。英ram も battering ram または単に ram でこの破城槌を意味する(13)。独Rammbock「雄羊」はまたこの破城槌でもある。またSturm「突撃」を加えてSturmbockとも言う。英語ramやドイツ語Rammeは「(水圧機などの) ピストン」をも指す(14)。また両語はここからto ram, rammen「(くいなどを) 打ち込む；(地面を) つき固める」,「激しく打つ，大きな力で打つ」などの動詞を作っている。雄羊の意の標準形はWidderだが，この語も破城槌を意味し，これらの用法にはラテン語のaries「雄ヒツジ」が対応している(15)。

3つ目の対応に移ろう。ドイツ語では鉱山で石炭などの運送に用いるトロッコをHund「イヌ」と呼んでいるが(16)，DWによるとフランス語でもchien des mines「鉱山のイヌ」＞「トロッコ」と言う(17)。ドイツ語のKatzeは「ネコ」だが，これは又「(天井クレーンなどの) [走行] ウィンチ台車」を指す。これはLaufkatzeとも呼ばれるものである(18)。LGED

でcrabを見ると，技術用語としてLaufkatzeが出てくる。天井を走る台車をネコに見立てたりカニに見立てるわけである。他方GDUXIXにはchat「ネコ」について，chevalet de couvreur「屋根葺き職人のchevalet」とあり，ここでまたchevaletが現れる[19]。ところで，日本語の「ネコ」は「猫車」という表現があり，これは「箱の前部に車輪一個をつけ，後部に手押し用の柄をつけた車。土砂などを運ぶために用いる土砂用の一輪車。ねこ」(NKD) のことで，「ネコ」だけでもこれを指す。方言では「物を運ぶ一輪車」,「背負い篭の一種」などが同辞典に記されている[20]。

## 3．命名のメカニズム

### 3．1．問題

前節でSDの動物がTDの道具類に対応する例をみた。観察を纏めておこう。

まず道具類に動物が象られているケースがある。andiron/landier/Feuerbock「薪架」, bélier/(battering) ram/Ramme「破城槌」などに当てはまるようである。また,「水道の蛇口」は英 (water)cock, 独(Wasser)hahn, 仏robinetである。まず「蛇口」だが，東京の水道施設は淀橋浄水場が完成するのが明治44年で，工事にはかなりの年月がかかっている。明治32年の『風俗画報』の落首に「井のうちの蛙も今や住かねん蛇口をつかふ鉄管の水」がのっている。堀越 (1981：241) は共用水道について,「この水栓という名前がまだ一般に普及してなかった頃は，蛇口という名前が用いられた。このころの共同水道は，水の出口が龍の口をかたどっており，蛇体鉄柱式共用栓と呼称されたほどで，そもそも蛇口と呼ばれる語源はここに発したと見る向きが多い」と記している。中国語では竜口と言うので，水と関わりの深い竜からの発想だろう。

仏robinetは，中世フランス語でRobertから出た人名Robinが羊の名称としても用いられ，ここからの指小辞語尾-etによる派生語だという。つまり，噴水fontaineの水の出口はしばしばmascaron「[建築] 仮面飾り：アーチの要石や柱頭などの装飾として用いる，通常グロテスクな頭像

または仮面の装飾」(SRDFJ) が用いられるが，動物の頭が多かったというのである (DHLF, TLF, etc.[21])。

次に動物の形態や振舞が何らかの道具類を喚起する時に動物名の転用が起こり得る。仏独で girafe/Girafe「きりん」が「[映画] 録音用のマイクを吊すための竿」(SRDFJ)，「[戯] (キリンの首に似た移動自在の腕木をもった器具，例えば：) (舞台用の) マイクロフォン」(GDJW) のような意味を持つのは理解できる。仏 chenille，英 caterpillar，独 Raupe は「芋虫，毛虫」などを意味するが，同時に「カタピラー」を指し，英 crane，仏 grue，独 Kranich「ツル」が「クレーン」を指すのも同様である。

しかし (大形の) 動物名が屋根を支える梁や，物を上に置く台を意味することは，単に類似によるメタファとは言えない。

物を命名するときの方法は，形態的には (M1) 既存の語をそのまま用いる；(M2) 既存の語から派生・合成などによって新しい語を造る；(M3) 外国語から借用する；(M4) 全く新しい語を造る，という 4 つが考えられる。(M4) は一般に非常に困難なことが知られている。意味的側面から見ると，(S1) 対象の色，形；(S2) 対象の果たす機能；(S3) 対象に付与する象徴的特性などが注目の対象となり得る。(M1) ～ (M3) では語の適用領域の変化が認められ，(S1) ～ (S3) との関わりの中でメタファやメトニミが問題となるわけである。

1．2．で隠語における類義語系の現象を見たが，そこでの TD は 1 つの概念であった。ところが 2．で見た道具類では TD が複数の概念を持つ意味領域であり，新たな対象についてもそれが同じ TD のものならば動物の SD から名称を転用できるのである。いずれに於ても，上記の (S1) ～ (S3) だけでは説明がつかないので，SD と TD の間に特殊な関係を想定することになる。

蛇口のケースでは，道具類が動物の身体や頭などの小像を装飾として持つ (S1) のケースでメトニミの介入を考えざるを得ない。仏 chien「犬」が「撃鉄」を意味するのも同様とされる (但し英 cock，独 Hahn 参照)。

しかしそれでは何故問題の道具類に問題の動物が結びつけられたのか，という疑問への答にならない。

さらに，「台架」のケースではもはやメトニミの可能性は消えてしまい，メタファを考えざるを得ないが，注目すべきことは，言語間・方言間でSDの動物が異なることである。SDがある種の動物でさえあれば，それが具体的に馬であろうが牛であろうが鹿であろうが構わない[22]。

一般に道具類の名称は特殊・専門用語に属すことが多く，動物名を転用しても混乱はまず起こらない。文脈が動物を排除して道具類を要求するのが普通だからである。しかしこのことは動物名を転用することがコミュニケーションの妨げにならないことしか言っておらず，なぜ動物名が用いられるのかの説明にはなっていない。しかも動物名の転用は恐らくは多くの言語に独立して存在すると考えて良かろう。

Guiraudはしばしば語の背後に意味のメカニズムを想定する。動物と道具類の対応も個々の事例を超越した何らかのメカニズムを反映していると考えられよう。しかしSDとTDとの対応をそのままこのメカニズムと見なすことは，個々のSDの介入の根拠を示したことにならない。

現在の特殊・専門用語は核エネルギーの例で見たとおり分析的な傾向が強い[23]。その点動物名は非分析的であり類似的にしか過ぎない。そしてその類似性でさえ，個々の動物種の問題でないのは今見たとおりである。

3．2．仮説の構築に向けて

Nicokaï（1997）は，Foucaultの説く16世紀まで一般的な名前の解釈，すなわち，ある名称を他の対象に適用することで両者の深い隠された関わりが銘記されるという解釈を引用した後，Saussureの説く関係的存在としての記号ではなく，せいぜい（弱い意味で）分類的でしかない記号が動植物の命名に現れていると論じている。これに従えば雄羊類と破城槌は，名称の転用によって前者の特性を後者に刻印し，二次的に槌の方が武器の中で位置を占めるということになろう。

松井（1996）は伝統社会における動植物の命名の精緻さと周到さに感嘆すると同時に，それが実用的な目的を持つとは限らないことに注目し，

「[土地の人たち] の関心は，生活上の重大な意味を担うこともあれば，ただおもしろいという興味に支えられているだけのこともあろう。しかし，いずれのときにも，彼らはつねに具体的，個別的な自然物をじっくりと観察し，あるときには次に巧妙にそれを捕獲し，またあるときには彼らの想像力の係留点になるような名前を付けたりして楽しむのである」と述べる。

これらの考えは動物と道具類との対応の説明に有効性を持つ。しかしもう1つ考えねばならないことがある。それは，動物がSDで道具類がTDのケースを扱ってきたが，逆のケース，つまり道具類の名称が動物に適用されることは余りない，という事実である。この一方向性unidirectionalityが道具類の命名を特徴づけているのであり，よく文法化で話題になる一方向性[24]をも思い起こさせる。

人間は動物と接し，動物を恐れ，避け，または利用すべき対象として生活に取り入れてきた。道具類の歴史が動物との関わりより新しいことは言うまでもない。自ら動くことのない対象よりも移動可能な動物の方が注目を引きやすいし，道具類よりも動物との交わりの方が社会の中でより親密なことも明らかであろう。道具名を用いる「荷車／金槌のような」と，動物名を用いる「ウシ／ウサギのような」の比喩を比べると，後者が非常に豊富なイメージを提供していて，適用範囲が広いことに気づく。具体物間に成立するメタファの方向性は，この適用範囲，そしてその背後にあるイメージの豊富さ，そして最終的には人間との関わりの深さに依存していると考えられよう[25]。

## 4．結語

本稿はSDとTDという概念を用いて，動物の領域と道具類の領域との関係を調べた。ここで取り上げきれなかった動物名も多いが，隠語，技術用語，地方語などでの例の数は想像しきれない。しかし重要なことは，この動物と道具類との領域対応が極く一般的な現象であることで，今後はここで扱った英独仏と日本語以外の言語に調査を広げて，メタファの方向性を検証する必要がある。

道具類に用いられる動物名は用語・術語体系の中で非常に特殊な位置を占めている。技術・職業につながり専門的であると同時に，cock/Hahn/robinet/「蛇口」のように一般語彙に入り込んで語源意識が薄れてしまうこともある。意味領域の対応は命名生成装置として機能すると言ったが，今日の術語体系から消え去ったわけではない。仏 puce（「ノミ」）「集積回路のチップ」や英 mouse（「ネズミ」）「コンピュータのマウス」などは比較的新しい。Vidalenc（1997）は科学用語でのメタファが社会的慣用により英語と仏語で同じ広がりを持たないことを指摘している。これも対照研究で重要なテーマの１つとなろう。

## 注

（＊） 本稿は1998年５月，フランス語学会が主催したシンポジウム「メタファーをめぐって」において提起した類義語系の問題を出発点としてこれを大きく発展させたものである。シンポジウムでは赤羽研三，山梨正明両氏との討論から多くの示唆を受けた。I. Tamba，藤田知子両氏には長時間に亘る議論と文献の便を負っている。また泉邦寿，B. Cerquiglini 両氏からも様々な指摘を頂いた。諸氏に深く感謝したい。

（１） Geeraerts（1997）は優れた歴史的認知意味論であるが，動物と道具類との対応という本稿で扱う問題がどのように扱われるであろうかは明らかでない。

（２） 日本語の食料としての動物名は，「{ウサギ／ウサギの肉} を食べる」が「肉」と結びつくが，「{魚／魚の身} を食べる」では「身」と結びつく。ただし「魚肉」のような表現もあり複雑である。フランス語では「肉」の意味で部分冠詞が介入することがある（manger du bœuf)。また死産した子牛から作るベラム（犢皮紙）が vélin（＜veelin＜veel「子牛」（＜vitellus）＋-in）で，英 vellum はこの借用形である。skin（/fur)/peau (cuir/fourrure/pelage)/Haut（/Fell）や日本語の「皮膚」／「肌」（／「表皮」）／「皮（革)」なども参照。

（３） Kleiber（1994）のメトニミ統合の考え方がこれで，川口（1998）では「目」に適用した。Delhay（1997）はこれを提喩に応用している。

（４） 仏 chien「イヌ」は一般に悪いイメージのメタファの供給源だったが19世紀に良い意味合いが生まれた（Sainéan（1920))。日本で「タヌキ」は「さまざまな野性哺乳類を意味していたがしだいにタヌキの怪異に収斂して」いったとのことで，江戸時代に化かしが頂点に達する（中村（1984):

134)。

(5) この用法の記述は数多くある。フランス語については Guiraud (1967) が詳しい。隠語では Sainéan (1920) 参照。なお，メタファー般については赤羽 (1997)，仏語の幾つかの動物名とその転用については松原 (1996) を参照されたい。また動物名があだ名から個人名，そして姓になることについては Lebel (1974) 参照。

(6) Guiraud (1956, 1964) が詳しいが，Calvet (1993) の解説と発展も参照。

(7) この現象は仏語に限ったことではない。例えば英 overlook は「邪悪な目で見る，魔法をかける」の意味から「だます」(1596) の意味を派生させたが，その一世紀後 oversee が同じく「だます」の意味を獲得した。oversee は overlook との意味的類似から「だます」の意を獲得したのであり，直接「だます」に辿り着いてはいない (Ullmann(1957): 226)。

(8) andiron は短い脚の上に水平に置いた 2 本の平行の鉄棒で，燃える薪が落ちないように支える (landier de cuisine)，または料理の焼き串を支える (landier d'appartement) もので，多く装飾が施されている (EB, GDUXIX)。GE の図参照。薪架の歴史と *anderos のロマンス諸語での展開は Benoît (1924) に詳しい。

(9) この chenet「薪乗せ台，薪架」も chien「イヌ」から来ているし，英も fire-dog と言うのを(4)で見た。独 Feuerhund「火＋犬」，Feuerhengst「火＋雄馬」(DW) も参照。

(10) Delhay (1996) は指小辞接辞の付いた語 (chevalet) と付く前の語 (cheval) との意味関係を論じるが，この現象は一般性が高いので，個別語の形態にとらわれすぎるのは危険であろう。

(11) mouton の「横木」の意味は後述する「破城槌」につながる。仏 bourdon 参照。なおブルゴーニュ地方で chèvre「山羊」が「蛇口」を指すようになる過程について Herring (1937：418-9) 参照。

(12) Lebel (1974) 参照。去勢した雄羊または総称として羊一般を指す現代仏語の mouton はゴール語から来ていて，元来は去勢した雄羊を指したが，bélier がその意味を帯びるにつれて現在の意味に変化した (DHLF)。

(13) BDE 参照。

(14) Cf. hydraulic ram, hydraulische Ramme「水撃ポンプ，水圧ラム；ゆるい傾斜を降下する水を急激に止めて，その反動によるエネルギーを利用して水の一部を高所にくみ上げるポンプ」(SREJD)。

(15) 英語 beetle には「大槌，胴突き，(地固め用の) たこ」の意味があるが，これは bite と関わる「甲虫」とは語源が異なり，beat の系統の語である (ODEE)。しかし両者を峻別することは今日では難しそうに見える。

(16) Cf. “bei den bergleuten ein länglich viereckiger, oben offener, auf vier rädern ruhender kasten zur förderung auf stollen oder strecken” (DW)。なお英でも dog (LGED) だが，OED には言及がない。

(17) “Genre de chariot en usage dans certaines mines, pour le transport du minerai jusqu'à l'orifice du puits. Le chien, ou chariot de mine, est surtout usité en Allemagne” (GDUXIX)。したがって，chien (des mines) はドイツ語からの直訳借用 calque である可能性を排除できない。技術用語には国境，言語を越えて広がっていく傾向がある。

(18) Laufkatze は既に見た Feuerbock などと同様に合成語である。動物名が介入する道具類の名称が合成語からの省略によって生まれる可能性はある。日「コウモリ」は元「コウモリ傘」と呼んでいたものの省略であろう（石井 (1997)：311)。合成語のどの部分が省略されるのか重要な問題だが，議論は別の機会に譲る。

(19) 「[建築] (屋根ふきに用いる) スレート置き (台) (=bourriquet)」(SRDFJ)。ここに出る bourriquet は bourrique「ロバ」の指小辞形で「子ロバ」でもある。

(20) 「ネコ」には「土製のあんか」,「湯たんぽ」,「綿を入れた背中当て」,「荷を負うためのわら製の背中当て」,「わら製の大形のむしろ」などが方言の意味として登録されている。「背負い篭の一種」の意味がこれらの意味と関係付けられるべきであることは言うまでもない。

(21) この興味深い仏 robinet は研究史を Herring (1937) に見ることができる。これによると，robin(et) は Widder, Hammel, Stiere, Ochsen, Kälber, Pferde, Hasen など様々な動物を指すのに用いられたという。なお仏語でも蛇口を「ニワトリ」に模する語が様々にあったし，その他の動物名も諸方言で現れる。独でも Kranich「ツル」が方言で Kran「クレーン」(元来は「ツル」の意) と同様に蛇口を指す。南仏や西語のグリフィンや，「ニワトリ」について robinet と平行する説明についても Herring (1937) 参照。

(22) Herring が robin(et) が様々な動物を指し得ると言うのは注(21) で見たが，「台架」のケースを考えると，動物種の特定は二次的に思われる。Guiraud (1967) は語源説明での外的要素と内的説明の区別を説いたが，Herring は外的要素を重要視しすぎていると言えよう。

(23) ただし Vidalenc (1997) が示すように個人の創造によるメタファも重要な要素である。

(24) 川口・阿部 (1997) 参照。但し仏 crapaud「ヒキガエル」はゲルマン系の *krappa「鈎」からか (DHLF)。また DEO は chantier を道具から動物名への派生と見なすが，DHLF は FEW に従ってこれを無視している。

(25) Kövecses & Radden (1998) はメトニミについての方向性を考察していて非常に示唆的である。また人との関わりについては Cadiot & Tracy (1997) 参照。なお動物と道具類との対応は，後者が判りにくいから前者を用いて認知を助けるというようなものではない。むしろ引用した Nicolaï (1997) のように考えるべきだろう。

[辞書]

BDE : *The Barnhart Dictionary of Etymology*.

DEO : *Dictionnaire des étymologies obscures.*

DHLF : *Dictionnaire historique de la langue française.*

DW : *Deutsches Wörterbuch,* (J. Grimm und W. Grimm).

EB : *Encyclopædia Britannica*, 14th ed.

EWD : *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen.*

FEW : *Französisches Etymologisches Wörterbuch.*

GDJW :『独和大辞典』(小学館)。

GDUXIX : *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle.*

GE : *La grande encyclopédie.*

HFEDEF : *Harrap's New Standard French and English Dictionary*, Part 1 English-French, reprinted with Supplement.

HFEDFE : *Harrap's New Standard French and English Dictionary*, Part 2 French-English, Revised and enlarged edition.

LGDE : *Langenscheidts Großwörterbuch Deutsch-Englisch.*

LGED. *Langenscheidts Großwörterbuch Englisch-Deutsch.*

NKD :『日本国語大辞典』(小学館)。

ODEE : *The Oxford Dictionary of English Etymology.*

OED : *Oxford English Dictionary,* 2d ed.

SREJD :『小学館ランダムハウス英和大辞典』。

SRDFJ :『小学館ロベール仏和大辞典』。

TLF: *Trésor de la langue française.*

[文献]

赤羽研二 (1998) :『言葉と意味を考える』，夏目書房

Benoît, P. (1924) : "Die Bezeichnung für Feuerbock und Feuerkatte im Französischen, . . .", *ZrPh*, 44.

Cadiot, P. & L. Tracy (1997): "On n'a pas toujours sa tête sur les épaules", *Sémiotique*, 13.

Calvet, L.-J. (1993): *L'argot en* 20 *leçons, ou Comment ne pas en perdre son français, Suivi d'un appendice grammatical*, Paris, Editions Payot &

Rivages.
Delhay, C. (1996): *Il était un "petit X". Pour une approche nouvelle de la catégorisation dite diminutive*, Paris, Larousse.
--(1997): "La synecdoque : entre métonymie et hyperonymie?", *Verbum*, 3.
Geeraerts, D. (1997): *Diachronic Prototype Semantics. A Contribution to Historical Lexicology*, Oxford, Clarendon Press.
Goossens, L. (1990): "Metaphtonymy : the interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action", *Cognitive Linguistics*. 1.
Guiraud, P. (1956): *L'argot*, Que sais-je?, Paris, PUF.
--(1964): *L'étymologie*, Que sais-je?, Paris, PUF.
--(1967): *Structures étymologique du lexique français*, Paris, Larousse.
Herring, W. (1937): "Über den Zapfhahn und seine Namen in Frankreich", *ZrPh*, 57.
--(1940): "Nachtrag zu frz. robinet", *ZrPh*, 60.
堀越正雄 (1981)：『井戸と水道の話』，論創社。
石井研堂 (1997)：『明治事物起源』 8，筑摩書房。
川口順二 (1998)：「目の文法化をめぐって」，『芸文研究』，44。
川口順二・阿部宏 (1996)：「文法化」，『フランス語学研究』，30。
Kleiber, G. (1994): *Nominales : essais de sémantique référentielle*, Paris, A. Colin.
Kövecses, Z. & G. Radden (1998): "Metonymy : Developing a cognitive linguistic view", *Cognitive Linguistics*, 9.
Lebel, P. (1974[7]): *Les noms de personnes,* Que seis-je? Paris, PUF.
松原秀一 (1996)：『フランスことば事典』，講談社。
松井健 (1996)：「ものと名前の人類学」，in 宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』，世界思想社。
中村禎里 (1984)：『日本人の動物観—変身譚の歴史—』，海鳴社。
Nicolaï R. (1997): "Ethno-taxonomies et représentations étymologiques : en regard des dénominations populaires de la faune", *Les Zoonymies*, 38.
Sainéan, L. (1920): *Le langage parisien au XIXe siècle. Facteurs sociaux--Contingents linguistiques--Faits sémantiques--Influences littéraires*, Paris, Boccard.
Ullmann, S. (1957[2]): *The Principles of Semantics*, Oxford, Basil Blackwell.
Vidalenc, J,-L. (1997): "Quelques remarques sur l'emploi de la métaphore comme outil de dénomination dans un corpus d'histoire des sciences", in Boisson, C. & P. Thoiron (éds.): *Autour de la dénomination*, Lyon, Presses Univ. de Lyon.